

ちゅうこうのそ

中興の祖



宮地 彌典会長

「中興の祖」とは、“政権を担当してから安定化や維持に多大な功績があったと評価を受ける者をいう”とあらわされています。

副社長、社長、会長を長く務めた宮地彌典は、当社の中興の祖といわれるにふさわしい事業環境、社員教育、お客様・仕入先様との絆、社会とのつながりを創られました。その功績、事跡を記します。

宮地彌典は東京電機大学電気工学科卒業と同時に、1966(昭和41)年に当社に入社しました。当初は電気工事部門に勤務し、現場代理人として、高知市内の現場の設計・管理を担当し、時には一社員として現場での業務も行いました。

その後、高松支社の支社長として赴任し、現在の高松支店の礎を築きました。これから成長の芽を育もうという時期に、創業者が病に倒れ会社業務からの長期離脱が懸念されたことから、急遽、代表取締役副社長として本社に異動となりました。

高知への赴任を機に、高知県の経済界の方たちとの交誼を深め、経営に活かそうと高知青年会議所(JC)に入会しました。入会後は、先輩・同僚の会員たちとの融和も進み、要職を経験した後、1982(昭和57)年に第30代高知青年会議所の理事長に就任しました。特に教育分野に積極的に取り組み、「教育都市高知市を求めて」を発刊。提言書として各界に届け、後の教育改革の基盤となりました。

理事長時代もJCの仕事に相当な熱意を傾注しつつ、それにもまして社業に熱心に取り組む姿は尋常でなく、夜を徹しての仕事は周りが身体のことを心配するほどでした。

1983(昭和58)年9月には代表取締役社長に就任し、まずは取締役、経営職の足腰を鍛えることを目的に文章力の強化に熱意を注ぎました。社内誌COMMONの制作にあたっては、所管の責任者が業務推進報告書として提出した原稿に自ら赤ペンで修正を入れ、作成者の思いを壊さずに読者(社員)が理解できるように訂正を行い、年始にはお年玉と称した修正原稿を返却し無言の教育をしました。この時の文章力強化は考える人を育て、人に伝える能力を育て、今の宮地電機の底力となりました。

以降においても社員教育に熱意を注ぎ、自ら担当して照明設計研修を重ねた結果、当社には2015年9月21日現在、照明士151人、照明コンサルタント210人の有資格者が在籍しています。これは電設資材販売業者としては異色であり、誇るべき特長と言えます。

その他にもインテリアコーディネーター、1級・2級建築士、キッチンスペシャリストなど多くの社員が資格を保有しているのは、彌典会長の教育熱心な姿が継承されている賜物であり、同業他社に対して知識・知恵で一步先んじていると言っても過言ではありません。

1993(平成5)年5月には商業施設ラ・ヴィータをオープンさせました。地下1階レストランから8階ホールにいたるまで、文化の創造とイタリアへのこだわりを満載に表現した商業ビルの誕生は地元高知でも大きな話題となりました。

1997(平成9)年、高知県教育委員会委員長を委嘱され、社員数約300人の当社社員数と桁の違う教職員約8,000人の教育行政に関する最終決定者となり、高知県議会にも出席し、以降13年間にわたり大過なく勤め上げました。

その経験の中でも、社員・会社にとって良いと思われることは積極的に採用し、成果主義人事制度・定年後再雇用制度・誕生日休暇・マタニティー勤務制度・ボランティア休暇・確定拠出年金制度などを次々と導入されました。これら社会に先駆けた取り組みが評価され、2009(平成21)年には「につけい子育て支援大賞」を受賞しました。

また、お客様を大切にするという考えは創業者から引き継がれており、時間を割いてはお客様訪問を繰り返し、営業担当者が仕事に取り組みやすいようにサポートし、招待会・主要な会合には欠か

さず出席しました。今でもお客様からは彌典会長の話が途絶えないほど愛されています。

その他にも日本照明学会理事、全日電材連副会長、高知県経営者協会副会長、四国電設資材卸売組合理事長を歴任され、社業中心においても多くの役職をこなされました。各要職に就いているときも、常に率先垂範し、すべてのことを本質から考え、大局観を持ち、安易な妥協を許さず真理を追究する人でした。自他ともに厳しい反面、人間的な包容力と優しさにあふれ、多くの社員から常に敬愛されていました。

数々の功勞に対して、2004(平成16)年10月には文部科学大臣表彰(地方教育行政功勞)、2013(平成25)年5月には旭日小綬章を受賞されたことは会社にとって大きな栄誉となりました。



2013年5月 旭日小綬章受賞

2015(平成27)年2月25日、病には勝つことができずに他界されました。各界の方から惜しまれ、3月17日の社葬には約1,200人の方にお見送りをいただきました。創業70周年を元気で迎えられなかったことを、大いに悔やまれていることと思います。社会や会社に多大な功績を残されたことに深く感謝し、永続する企業になってゆくことが何よりのご恩返しであり、会社の未来につながります。

